

團體的展覽會

黑田清輝

（本篇は、洋畫界の泰斗黒田清輝氏の談話を筆記したるものなり。 記者）

公設展覽會が年々開催せらるゝに就いては將來美術界が小團體を擁して、夫々展覽會を開くが必要がなければ、須く之を解くべしとの説を爲すものがある。之に就き黒田畫伯が語る所は、藝術家の位地より説き來たりて、藝術の爲めに傾聴すべきものあれば、左に其概要を記して讀者に紹介する。

公設的展覽會には自ら展覽會向きの繪畫が多く出品せらるゝとは、獨り我が文部省展覽會の上ばかりでなく、佛蘭西でも、何處でも同じこととて、謂はゞ晴れの場所にて多數觀客の視力を惹き付け、喝采を得やうとするには、畫家は勢ひ特別な用意と態度とを以つて、カンバスに臨むこととなるのが多い、即ち自分といふものよりは、先づ觀客といふ相手を考量の中に置く譯になる世に一ツ廉の畫家として打つて出るには、相當の手段でもあり、又之が非常の技術奨励ともなるので後進有爲の畫家は進んで所謂展覽會向きの繪を書く、又書くが宜いのである。唯だ一方に於いて、藝術の面白味と貴さは、不用意に、粧はずに、自己の靈臺に印象せる所を其儘に描き出だすと同時に、技術上の個性を其儘發揮するに在ることを記憶しなければならぬ。

此個性的の作品と展覽會との關係は、公設展覽會が持つて囃される時節に於いては特に注意を要する問題なので、眞個に藝術を研究し、又其發展を思ふものは、之に處する適當の途を講すべきである。

然るを、公設展覽會の開設を悦ぶ餘り、是れよりは畫界も小團體を解き、公設展覽會を自分の機關として、出品に盡くすが宜いなど、説くものを生じて來た。一寸俗耳に入り易い説ではあるが、實は斯藝の爲めに未だ深く思はざる議論たるに過ぎない。

此議論は一は小黨の紛糾等よりも思ひ到れるかは知らぬが技術以外の粉料は小黨組織者其者の罪なので、藝術上よりする議論の土臺にはならない。展覽會向き以外の作品の爲めにしても、換言すれば藝術的機關の彼此完備するを必要とする點よりしても、余は此議論に反して一方に公設展覽會が開かれる今日となりては尙ほ更ら斯界小團體の存在が益々必要であらうと思ふ。

色調子や筆使ひに自分の個性的流儀が現れて、特別の面白味あるものは、彼の態度を改め種々の野心を交ぜ來たる展覽會向きの作品には多く見られない、彼等の野心は之を容るゝとを許さない、若し個性的の作を敢てすれば、觀客は終に其前を通り過ぎて他の派手な、色の強い、何かに人の眼を聳えしむる所のある畫の方に往く。譬へば、佛國の大家にしたとあるで、ピユピスの傍にカロリユス デュランの色の強いのが掛れば、勢ひ觀客の眼はデュランの方に集注すると謂つた理窟で、大展覽會には、何うしても此傾向は免かれない。加之、公設展覽會の如き性質のものに在りては、出品の陳列方を其畫家自身が自由にする譯に往かざる結果、彼の個性的の作品などは光線の工合や近所の畫の色などに妨げられて自分の色の調子も、何も、適當に見せることが出來なくなる。

作品の面積の點から云つても、小さなものは大展覽會には損の所がある。然るに版下繪の如き、其他斷箋零墨と云つたような小品に個性の面白い所が味はれるのだ。

扱て大展覽會に於ける此等の缺陷は、何に依りて補はるゝかと云へば、個々團體が事業とする展覽會に於て、始めて補ひ得らるゝのである。

例へて言へば、白馬會展覽會の如きは、世間では新派のみの展覽會と稱するが、強ち左様でない、所謂舊派の中でも極舊い友人の山本芳翠なども、會員でもあり又出品もして居た。即ち個々特性の作品を陳列して、相摩し相娯むといふ仕組で野心的の特別用意を要するには及ばない世人が翫賞しなければ、しないでも構はないのだ、自分の面白いと思つた奴を出す光線や、外の繪との關係をも計つて其繪の有の儘を觀せ、他より内容を傷はれない様に陳列する、ふれは何れの團體の展覽會でも、同じ事で、それに屬する畫家の權利と自由なので、丁度自分の家に自分の氣に入つた繪を、自身で陳列すると同一なのである、特に畫家は誰れにしろ、或る相當の時期、必要の程度に於て展覽會向きの作を事としたりとて、何も之を以つて終世の能事とするのでは無い。自己の野心を以つて自己の藝術を束縛し了はるものはないので我藝術の生命を流露する所の本城といふものは有つて居なければならぬ。

其處が團體展覽會の眞價のあるとみて、又同時に藝術の研究に必要な所以であるを知つて貰いたく思ふ。而して投票點數に依頼するの結果、一二點の差が其境界となりて、公設展覽會の鑑査に落選する畫家の爲めにも之が非常の有益なる機關となるのである。

『時事新報文芸週報』三八明治四二年二月二七日